新潮文庫

時代と人間が見える

—読むことは生きること—

柳田邦男著

新潮社

時代と人間が見える
―読むことは生きること―

新潮文庫　や-8-17

平成十三年八月一日発行

著者　柳田邦男

発行者　佐藤隆信

発行所　株式会社新潮社

郵便番号　一六二―八七一一
東京都新宿区矢来町七一
電話　編集部(〇三)三二六六―五四四〇
読者係(〇三)三二六六―五一一一

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・錦明印刷株式会社　製本・錦明印刷株式会社

© Kunio Yanagida 1999　Printed in Japan

ISBN4-10-124917-2 C0195

新潮文庫

時代と人間が見える

—読むことは生きること—

柳田邦男著

新潮社版

6748

目

次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

ノンフィクション賞作品を読む

はじめに　10

(1) 大宅壮一ノンフィクション賞

大宅賞のはじまり　13

私の選評　24

(2) 講談社ノンフィクション賞

講談社賞のはじまり　64

私の選評　66

(3) 新潮学芸賞

新潮学芸賞とともに　100

私の選評　106

(4) 潮賞ノンフィクション部門

応募原稿対象の潮賞　144

生きる営みとしてのノンフィクション　148

(5) 講談社出版文化賞科学出版賞

科学出版賞のはじまり　167

私の選評　172

二人の作家の語録

回想　192

事実とシュールの同環

——安部公房氏の脳内で燃えていたもの

「小生は、河辺の葦たらん」

——司馬遼太郎氏の読後語録　200

書評という読書案内役

(1) 時代を考える読書アンケート　216
(2) 新聞書評十年　229

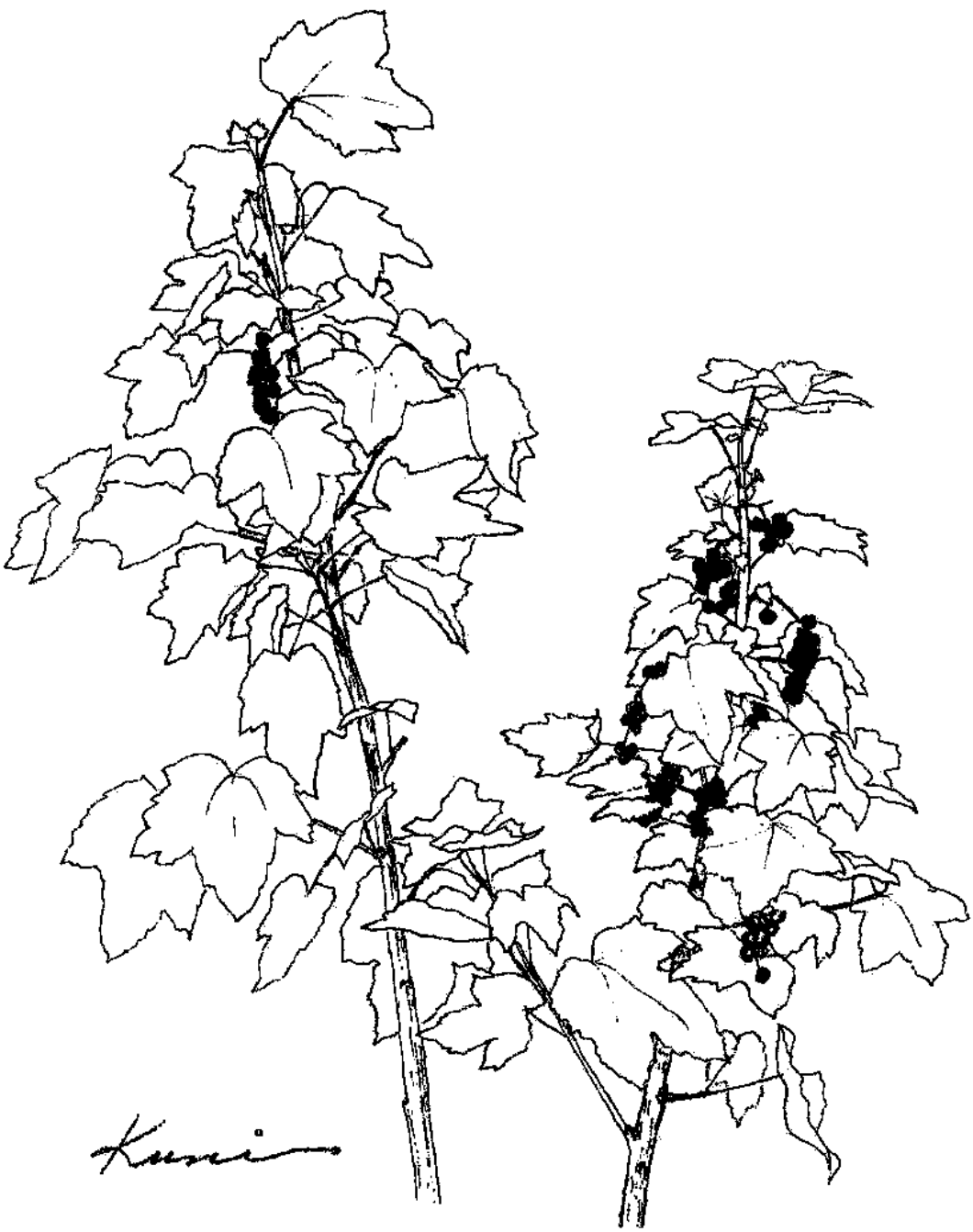
文庫版へのあとがき　320
解説　加賀乙彦　323

扉イラスト　柳田邦男

時代と人間が見える

―読むことは生きること―

ノンフィクション賞作品を読む



此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

はじめに

古くから様々な文学賞が設けられてきたが、それらはほとんど小説や文芸評論を対象にしたものだった。ノンフィクションも小説と同じように言葉による表現活動という点で文学の一ジャンルだと思うのだが、ノンフィクションの作品を対象にした継続性のある文学賞は（雑誌の投稿原稿を対象にした一時的なものは別として）、長いこと設けられなかった。それはノンフィクションが表現の一つのジャンルとして確立されていなかったことを示すものでもあった。その状況を変えたのは、一九七〇年に文藝春秋の発案で発足した大宅壮一（おおやそういち）ノンフィクション賞だった。それは今日的なノンフィクションの作品が書かれ始めた時期でもあった。私自身について言えば、その年は五年がかりで取材・執筆してきた処女作の『マッハの恐怖』の原稿の仕上げにかかっていた時期だった（ラジ出版社、出版は翌七一年三月）。

その後、ノンフィクションの作品が陸続と書かれるようになった時代傾向に呼応する形で、いろいろな出版社や新聞社がノンフィクション賞やドキュメンタリー賞を設け、そのことがまた作家やジャーナリストだけでなく様々な職業人や家庭の主婦が、ルポルタージュ、ドキュメント、旅行記、体験記などを書こうとする意欲を刺戟（しげき）する役割を果

たすという状況を生み出した。そうしたなかで、私は自分で作品を書きながら、ノンフィクションとその周辺の本をできるだけ収集して読むという作業を続けた。つまりノンフィクションという表現法の土俵の中で書くことと読むことをひとつながりの営みとしてきたのだった。そして、八〇年代以降いくつかのノンフィクション賞やその隣接領域の賞の選考にかかわるようになり、選評なるものを書く立場になった。ただ、選評といっても、大学教授が学生の論文を採点するような眼で高座から論評する姿勢は私の好みではなく、むしろ同じ表現活動をする一人として感想や感動や知的収穫について率直に述べるという姿勢で臨んできた。

振り返ると、そういう形の「読む仕事」をすでに十数年やってきたことになる。そして、その十数年間に書いてきた各賞の選評を年次を追って読み返してみると、私がノンフィクション・ジャンルの作品に関して、どのような期待を抱き、どのような読み方をしてきたのかを自己確認することができて、これからやろうとしている仕事への参考になる。それは私の個人的な事情だが、そういうこととは別に、受賞作と選評をずっと並べてみると、ノンフィクション・ジャンルで（その周辺も含めて）、書き手はどんな作品をひっさげて登場したのか、秀作と評価された作品はどのようなテーマをどのように刻み、いかなるメッセージを読者に送ったのか、といったことを同時代史的に俯瞰（ふかん）することができて、興味深い。

もちろん私がかかわった選考会はノンフィクション関係の賞の全部ではないし、ましてノンフィクション・ジャンルの秀作すべてが論じられたわけではない。また、作品の読み方と評価は選考委員によって違っている。時には、ある委員が絶讃し、ある委員は否定的な評価をするという正反対の読まれ方をすることさえある。私の選評はそういうなかの一つの読み方でしかないのだということを前提にして、以下の私の選評あるいは読後感を読んでいただければと思う。

(1)　大宅壮一ノンフィクション賞

大宅賞のはじまり

文藝春秋が大宅壮一ノンフィクション賞の設置と応募規定を発表したのは、『文藝春秋』誌の一九六九年十一月号においてだった。その応募規定は、賞のねらいを、「この賞はノンフィクション分野における〝芥川賞・直木賞〟をめざすもので、新しいノンフィクション作家の登場を促すとともに、すぐれた作品を広く世に紹介することを目的としております」と謳い、賞の対象となる分野を、「ルポ、内幕もの、旅行記、戦記、伝記、日記、郷土史、ドキュメンタリー等のノンフィクション作品」と決めた。郷土史までノンフィクションの分野に入れていたのは、地方に生きる人々の姿をとらえた作品や歴史発掘のドラマを掘り起こそうというねらいであったろう。その後は外されている。ともあれ、翌一九七〇年三月に第一回選考会を開いて、受賞作に尾川正二氏の『極限のなかの人間』を選んだのだった。

私が大宅賞の選考会に加わったのは、一九八五年の第十六回からだ。従って、私が大宅賞の選評を書くようになったのは、当然のことながら第十六回以降のことだが、その頃、大宅賞に見られるノンフィクションの傾向について、私は『臨時増刊文藝春秋』（一九八七年）に、「ノンフィクションこの十五年」と題する長文のエッセイを寄稿しているので、その一部をここに再録しておきたい。

＊

十五年といえば、満州事変から終戦までの歳月がすっぽりと入ってしまうだけの時の流れである。確かに、振り返ってみるに値する経過であろう。

この十五年間に、ノンフィクションの作品は、どのように変容したであろうか。

一つの試みとして、一九七〇年代初期の大宅賞の受賞作・候補作一覧と一九八〇年代半ばのそれとを、表にして比較してみる（◉印が受賞作。括弧内の応・雑は応募原稿、雑誌掲載の意、他は単行本）。

【一九七〇年代初期】

第一回　一九七〇年――◉尾川正二『極限のなかの人間』、石牟礼（いしむれ）道子『苦海浄土』（受賞辞退）、成家順子『私とベトナム戦争』（応）、立花隆『実像・山本義隆（よしたか）と秋田明（あけ）

大』（雑）、佐藤藤三郎『私の東京見聞記』（雑）、福岡徹『軍神』（雑）、内藤国夫『公明党の素顔』、長部日出雄『死刑台への逃走』、石毛直道『食生活を探検する』、佐橋嘉彦『解放戦線抑留記』、田中穣『三岸好太郎』

第二回　一九七一年――◉イザヤ・ベンダサン『日本人とユダヤ人』、◉鈴木俊子『誰も書かなかったソ連』、福林正之『マラソン爺さん半代記』（応）、金重剛二『タスケテクダサイ』、伊藤正孝『ビアフラ潜入記』、丸山豊『月白の道』、三浦雄一郎『エベレスト大滑降』、大塚滋『ああ星条旗』

第三回　一九七二年――◉桐島洋子『淋しいアメリカ人』、◉柳田邦男『マッハの恐怖』、石井静子『私の戦後史』（応）、早乙女勝元『東京大空襲』、伊藤正孝『南ア共和国の内幕』、中村浩『糞尿博士　世界を行く』

伝え聞くところによると、一九六〇年代末に文藝春秋が日本ではじめての常設のノンフィクション賞である大宅賞を創設しようと準備に入った頃、社内では、授賞の対象となるだけの作品が毎年毎年出てくるだろうかと危惧する声もあったという。

もちろんノンフィクションという表現方法は戦前からあったし、戦記ものや新聞記者による取材報告などがかなり書かれてはいた。とくに一九五〇年代後半に始まる週刊誌の時代を迎えて、雑誌を発表舞台とするいわゆるルポライターが登場し始めていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com